

# 長島有里枝「ケアの学校」

Yurie Nagashima School of Care

2023.1.14 [Sat.] – 3.18 [Sat.]

Minatomachi POTLUCK BUILDING 3F: Exhibition Space



## 長島有里枝「ケアの学校」

Minatomachi POTLUCK BUILDINGでは、アーティスト・長島有里枝と「ケア」について学びあうプロジェクトを行います。長島はこれまで写真や小説・エッセイなどの作品を通して、社会における周縁化されがちな人びとや事象をテーマに、フェミニズム的な視座から創作を行ってきました。本プロジェクトでは長島が港まちに滞在し、会場を自身のスタジオとして公開します。会期中、デビュー当時から取り組んでいる「セルフポートレート」の概念を通底させながら、これまでの表現に加え、パフォーマンスなど新たな手法にも向き合います。また地域の人や来場者とともに、時間や場所を共有し、対話や交流を重ねることで、さまざまな出来事をつくりながら、他者と自身のための「ケア」について考え、実践します。

長島有里枝 | Yurie Nagashima

1973年東京都生まれ。カリфорニア芸術大学ファインアート科写真専攻修士課程修了。武藏大学人文科学研究科博士前期課程修了。現在、東京都を拠点に活動。

社会で周縁化されがちな人びとや事象に、フェミニズム的視座から注目した作品を多く制作している。近年は写真だけでなく立体作品、映像、文章の執筆など、表現ジャンルを超えた活動を行っている。

主な展覧会に、DOMANI plus @愛知「まなざしのありか」Minatomachi POTLUCK BUILDING 3F: Exhibition Space、愛知(2022)、個展「知らない言葉の花の名前 記憶にない風景 わたしの指には読めない本」横浜市民ギャラリーあざみ野、神奈川(2018)、個展「そしてひとつまみの皮肉と、愛を少々。」東京都写真美術館(2017)など。出版歴に、「『僕ら』の『女の子写真』からわたしたちのガーリーフォトへ」大福書林(2020)、『Self-Portraits』Dashwood Books(2020)など。受賞歴に、第26回木村伊兵衛写真賞(2001)、2022年日本写真協会賞学芸賞など。展覧会「ぎこちない会話への対応策—第三波フェミニズムの視点で」金沢21世紀美術館、石川(2021)では、ゲストキュレーターをつとめた。

[yurienagashima.com](http://yurienagashima.com)

# 長島有里枝「ケアの学校」

2023年1月14日[土]—3月18日[土]

11:00-19:00(入場は閉館30分前まで)

会場: Minatomachi POTLUCK BUILDING 3F: Exhibition Space

休館日: 日曜・月曜・祝日 | 入場: 無料

企画: Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya] (青田真也、吉田有里)

主催: 港まちづくり協議会

助成: 公益財団法人 福武財団、公益財団法人 花王芸術・科学財団、公益財団法人 朝日新聞文化財団

協力: 名古屋学芸大学、名古屋芸術大学

## 会期中のイベント

以下のイベントに加えて、トークや読書会、フリーマーケット(各月第2土曜日を予定)、

お茶会など、さまざまなイベントを開催予定です。

**トーク 1月14日[土] 19:00-20:30**

ゲスト: 飯田祐子(名古屋大学教授/日本近現代文学、ジェンダー批評)

**発表会 3月11日[土] 19:30-**

ゲスト: ホンマタカシ(写真家)

• イベントによっては、ご予約や参加費が必要な場合があります。

• プロジェクトやイベントの詳細、その他最新情報などについては、

MAT, Nagoya のウェブサイト内、以下のページに漸次更新しますので、ご確認ください。

<https://www.mat-nagoya.jp/exhibition/10117.html>

• 会期中、アーティストが不在の日や時間帯があります。

誰もが安心して入場できるスペースを目指しています。以下に該当する方は、会場への入場をお断りします。

• 37.5度以上の発熱や、その他体調の優れない症状のある方

• 特別な事情なく、会場内でマスクを常時着用いただけない方

• 周囲の迷惑となる行動をとる方(\*会場でお声掛けする場合があります。)

新型コロナウイルスの感染状況によっては、変更や中止の可能性があります。

最新情報については、ウェブサイト・SNSでお知らせします。

Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]

MAT, Nagoya は、名古屋港エリアで住民と行政との協働で  
まちづくりを推進する「港まちづくり協議会」が委託事業とし  
て実施するアートプログラムです。名古屋港周辺では、1980  
年代以降さまざまな国際的な現代アートの活動が行われてき  
た歴史があります。その素地を受け継ぎ、創造性をもって活動  
する人々を歓迎し、制作・実践の場を創出することによって  
創造的なアイディアをまちに還元していくことを目指します。  
[www.mat-nagoya.jp](http://www.mat-nagoya.jp)

## お問合せ・アクセス

Minatomachi POTLUCK BUILDING

〒455-0037 名古屋市港区名港1-19-23  
(港まちづくり協議会事務局内)

TEL: 052-654-8911

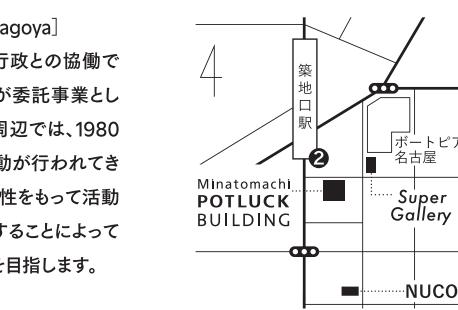
FAX: 052-654-8912

E-MAIL: [info@mat-nagoya.jp](mailto:info@mat-nagoya.jp)

WEB: [www.mat-nagoya.jp](http://www.mat-nagoya.jp)

\*名古屋市営地下鉄名港線「築地口駅」

2番出口より徒歩1分



Minatomachi  
**POTLUCK**  
BUILDING

港まちづくり協議会  
JOINT COMMITTEE OF PORT TOWN

本プロジェクトの会期中に、五〇歳を迎えます。デビュー以来三〇年、社会に対する個人的な思いや、自分にとって切実な問題を起点とした作品を制作してきました。途中でフェミニズムに出会い、そうした行動が The personal is political (個人的なことは政治的なこと) という実践になりました。わたしのしんどさや怒りなんて取るに足りないもの。誰かに話して聞かせたり、声に出したりすることは迷惑だと決めつけ、自分の殻に閉じ籠りました。思い詰め、心と身体のバランスを崩したとき、たまたま美大生だったのは運が良かった。表現することを学ぶ過程で、それまで押し殺し、無かつたことにしていた感情を解放しない限り、この先を生き延びることは難しいと気づくことができ、アートを通じて方法を探り、実践することができたからです。

子供の頃はとてもゆっくりだった時間の経過がいま、ものすごい速さに感じられます。世界も同じく、ものすごい速さで変化し続いているように見える

てもいるのです。

二〇二〇年に姉と慕っていた人、二〇二一年には娘と思っていた犬のパンクを亡くしました。生きているものはいつか死ぬ、という当たり前のことを受け止めるのが、こんなに辛いなんて。新型コロナウイルスだけが、人の命を奪うわけではありません。別離を経て感じたことは、いまだにこれといった言葉にできずにいます。二〇二二年二月、パンちゃんの写真を持って美容室に行き、髪をパンちゃんの体毛と同じ色にしました。

すごく大切なものを失うと、自分の望みや生きる意味がもともとはとてもシンプルだったことに思い至ります。わたしの場合はずっと、ただ楽しく生きたいだけでした。好きな場所で、好きなとき、好きなことができればよかったです。幸せな気持ちで眠りに就き、新しい朝を迎える。最後の日までそうやって、自分も、自分を大切してくれる人や世界も大好きだと思いながら生きたい。そんな小さな望みを叶えることが、なぜこうも難しく感じられるのか。考えると悲しくなる。だからなんとかしたくて自分はアーティストになつた、そんなことも思い出します。

暗室作業、編みもの、お絵描き、子供の世話、読書会、お菓子作り、ダンスや歌の練習。ずっとずっと大好きだったことをしながら、その場に居合わせた人と「ケア」について考えてみたい。ケアとは誰かを気にかけること。誰かとはなにより自分自身のこと。わからないことはわからないまままでいいし、感情や身体のコンディションが整わないなら休んでもいい。相手との距離を縮めるだけを目指すのではなく、遠いまま放つておくことも大切な気がする。とにかく没頭する時間が、自分を労わる。没頭するわたしの隣に没頭するあなたがいる。他愛もないことや、眞面目なことをお喋りしながら過ごす時間はきっと、未来の世界そのものを「制作」する力を持つはずです。

昨日まで正しかったことが今日は間違いで、さつき習得した技術もすでに廃れている、という具合に。そんな「いま」を、若いころと変わらぬおぼつかなさで、更年期を迎えた中年としてわたしは生きています。フェミニズムを勉強して強くなったり、生き易くなったりする」とはなく、「先生」と呼ばれても人より特別なにかに秀でているわけでも、確固たる自信があるわけでもありません。

そんなわたしが、ホームタウンから遠く離れた名古屋でできることはなんでしょうね。新型コロナウイルスの世界的流行の渦中につけて、ある人々は手を繋いで解決に向かうことよりも戦争で人のものを奪つたり、嘘を流布して差別や対立を深刻化させたり、経済を優先させて地球環境や命を蔑ろにしたりすることを選び続けています。生身の人と触れ合う機会は減つているのに、大きな物語はiphone や PC の小さな画面を介して、わたしたちの生活に大量に流れ込んできます。でも、そういう人が、そういう人が物語をどこかで生き